



志度高だより 一飛翔の窓一

第108号
(H22.9.17)

「猿とイノシシと鹿」

少し前に「トマコ」のことを書いたが、今日は猿とイノシシである。
「いやーもう手が付けられない。困ったもんだわ」実家に帰ったとき、知り合いのおばちゃんにそう言われた。手を焼いているのは猿とイノシシである。里山を下りてきて、もう我が物顔にそこら中を荒らし回る。食料強奪団というわけだ。野菜を作っても、自分たちの口に入る前に猿とイノシシに食われてしまう。恐れを知らぬ奴らめ、ここは一つ懲らしめてやるか。しかし、敵もさる(猿)もの、奴らを甘く見てはいけない。彼らは生活の中で常に学習をしているからだ。飽食の時代に生きる人間様と違って、のほほんとは暮らしていないのだ。

彼らは人間の行動範囲と行動パターンをぬかりなく観察している。いつ里山を下りどうやって作物を奪うか、ちゃんと心得ているのだ。そして行動も一気呵成にやってしまう。その決断力と行動力たるやたいしたものである。現在、日本の政界には真のリーダーがいまいと言われるが、猿とかイノシシにリーダーをやらせたら、国民の期待を裏切らない政治が可能になるかもしれない。猿真似自由党とか猪突民主党とか、いい名前も浮かんでくる。

それにしてもネットとフェンスで囲って野菜づくりとはなんとも興ざめである。昔は、野生動物へのお裾分けもちやんとあったのだ。人間もおおらかで、少しばかり作物がなくなっても大騒ぎしなかった。野生動物とうまく共存していたということだ。ところが今はと言うと、作る作物すべて猿とイノシシに持っていかれる。こうなると農家もやむなく防衛策となる。

しかし、猿とイノシシばかりを責める前に、なぜこうなったのか考えてみる必要がある。人間が勝手し放題するからこうなったのだ、と私は思う。猿とかイノシシが里山で暮らせなくなったのも、もとはと言えば我々人間が自分たちの都合のいいように、自然をコントロールしようとしてきたからではないか。今さら環境破壊に言及するまでもない。

おばちゃんの話には続きがある。私の実家は結構山の中である。おばちゃんはずっと山手に住んでいる。ある夜、おばちゃんが軽自動車を運転して家路を急いでいると、前輪辺りにドンというものすごい衝突音があった。月もない漆黒の闇の中のこと、もしかして人を……。おばちゃんの顔から一瞬にして血の気が引いた。ハンドルを握る手とブレーキにのせた足がぶるぶる震えている。おばちゃんは硬直した身をシートからはがし、恐る恐る車の前方に回り込んだ。ごくりと唾を飲み込み懐中電灯を照らした。「キャー」おばちゃんは遠のきそうになる意識をぐいと引き戻し、地面に横たわった黒い物を確認した。正体はイノシシだった。

おばちゃんはさらに続けた。左前のドアは開閉ができないほど大きくへこみ、結局、修理に何十万もかかった。保険を使おうにも相手がイノシシではどうにもならない。えい、こうなったら、とおばちゃんは免許を持つ知り合いに頼み、イノシシを解体してもらった。それから親戚連中を呼んで、盛大に飲めや歌えのイノシシ鍋をしたとのことである。恐るべしはおばちゃん。

ここで話は大きく変わるが、小豆島に万里の長城がある。とは言っても、中国のあの万里の長城みたいな立派なものではない。しかし、見ようによっては万里の長城である。少なくとも私は小豆島版万里の長城と考えている。イギリスにもハドリアンウォールという長い壁がある。これはブリテン人が北方民族の襲来を防ぐために作った軍事上の壁であるが、小豆島のそれは「シシ垣」と呼ばれ、イノシシと鹿から作物を守るためのものである。イノシシと鹿は「シシ」と呼ばれる。そのため「シシ垣」となった。人間だけでなく動物にとっても、生きるというのは過酷なことだ。守る者、奪う者。「シシ垣」は命のせめぎ合いの分水嶺である。

「シシ垣」に足を取られ前脚を折った鹿がいた。「シシ垣」を越えたのはいいが、今度は戻れない。農夫は鹿をじっと見ていた。目の奥に不安の色があった。農夫は石組みを解き、わずかな隙間を作ってやった。鹿は三本足で飛ぶように隙間を抜け、数歩行ったところで立ち止まった。そしてゆっくり振り返った。農夫は「いいんだよ」と頷いて鹿を見送った。

食欲と芸術の秋。たらふく食って寝るばかりじゃ、猿とイノシシに笑われるぞ。確と心せよ。^{しか}

